

中学校のカリキュラムマネジメントにおけるミドルリーダーの役割

－ 資質・能力を育む教科等横断的な授業実践に基づいて －

学籍番号 199109
氏名 島崎圭介
主指導教員 柏木賀津子

1. 背景

本校の生徒が抱える課題として、主体的・協働的に問題解決する力、授業で得た教科の知識やスキルを他の場面で活用するという力の2点が挙げられる。一方、実習校の教職員の抱える課題の所在は、教育内容等の関連性と教職員間の協働性にある。教職員と教職員、教科と教科のつながりは、生徒の深い学びに寄与するだけでなく、教職員の授業力向上やより良い学校組織に向けた意識の向上に良い影響を与える。そのため、個別化から協働化組織に向けた実践に取り組み、実習校内に関連性と協働性を生み出すことが求められる。

2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、1) 教科等横断的な授業及び、カリキュラムマネジメントを通して、生徒の学びを活用する力を含む資質・能力を育成すること、2) 組織に関連性・協働性を生み出すことの2点である。

研究の方法は、1) 中学生を対象に、複数教科担当者と協働的に教科等横断的な授業を計画、実施する。PISA 調査テストを基に筆者が作成した活用力調査テストを事前・事中・事後に実施し、その変容から教科等横断的な学びの効果を分析する。2) ミドルリーダーとして教科等横断的な授業を基軸にしたカリキュラムマネジメントを実践し、組織に働きかけを行う。ミドルリーダーとしてどのような役割を担うことができるのかを、プロセスから考察する。なお、1) と 2) は、相互的に関係し合いながら同時進行で行われるものである。

3. 実施方法と計画

3.1 活用力調査テスト

公立中学校 2 年生（調査開始時は 1 年生）99 名を対象に、教科等横断的な授業を実施し、活用力調査テストを事前、事中、事後に行う。調査は PISA 調査を参考に筆者が作成し、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシー、英語力の 4 つのリテラシーを測定する。また OPP シートを活用して質的な分析を行う。

3.2 ミドルリーダーによる組織への働きかけ

ミドルリーダーとして、①教職大学院通信の発行、②単元配列表の作成と活用、③自主研修会、校内研修等の企画、④総合的な学力向上委員会の発足の 4 つの取り組みを基に組織に対す

る働きかけを行い、校内に連関性と協働性を作り出すことを目指す。

4. 結果と考察

4.1 教科等横断的な授業の効果について

最終の分析対象は88名となった。活用力調査テストの合計点の結果から、教科等横断的な授業が生徒に一定の良い影響を与えたという結果が認められた ($F(2, 87) = 17.03$, $**p = .001$, $\eta^2 = .16$, 効果量大) (図 1)。特に数学的リテラシーでは大きな点数の伸びがあった(図 2)。しかし、科学的リテラシーにおいて、有意差は認められなかった。OPP シートからは、「新たな視点や方法に関する記述」をする生徒が増え、理科で得た知識の活用や道具の具体的な活用という点において多くの生徒の記述が確認できた。本実践を通して、教科の内容を活用する力、そのための思考力、創造力、想像力、仲間と共に協働的に問題解決を目指す力が向上した。

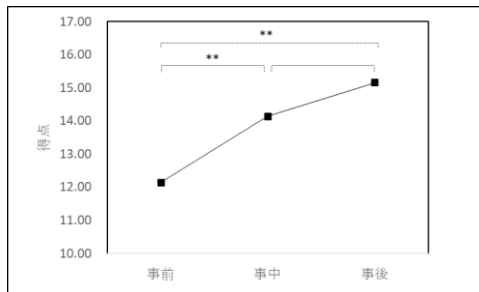


図 1 合計点の平均点の推移

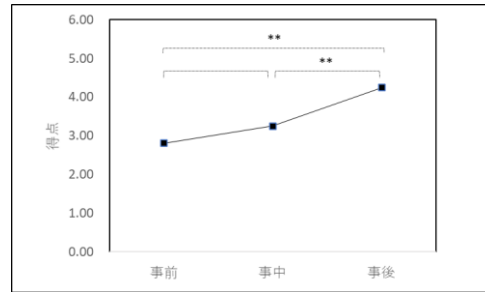


図 2 数学的リテラシーの平均点の推移
($n=88$, $*p < .05$, $**p < .01$)

4.2 校内のカリキュラムマネジメント

豊かなコミュニケーションを土台にしながら、本実践は2年をかけて校内全体での取り組みとして、教科主任会や校内研修等、より組織的な実践へと発展した。またその中で、単元配列表や教職大学院通信は、ツールとして本実践の推進に大きく影響を与えた。2年目に設立した総合的な学力向上委員会では、他のミドルリーダーと協働的に、総合的な学習の時間における教科連携を推進する等、より実践的な働きかけをすることができた。

結果として、総合的な学習の時間を活用した教科等横断的な授業の実践や、引継ぎシステムを確立したこと、校内研修を通して学校全体でカリキュラムについて考える機会を設けることができたことから、一定の連関性と協働性を教育活動及び学校組織に生み出すことができた。

5. まとめ

教科等横断的な授業の効果を分析した結果、一定の成果を得ることができた。複数の教科と関連付けたり、統合したりする授業を通して、生徒の資質・能力の向上を目指した結果、教科等横断的な授業によって、生徒の学びを活用する力の向上が認められた。

ミドルリーダーが、1) 同僚との豊かなコミュニケーションから関係性を醸成しつつ、2) 情報等のインプットとアウトプットを循環させていくことで、組織全体への働きかけに向かい、より多くの同僚を巻き込んでいくことができる。そうすることで、組織的なカリキュラムマネジメントを実践していくことができると結論づけた。